

京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞  
声をかけ手を差し伸べる大切さ

京都市立加茂川中学校 三年 杉 いおり

「住むところがなかったから、犯罪をして少年院を家にするしかなかったのです。」

ある青年が言ったこの言葉に私は衝撃を受けた。彼は複雑な家庭環境で育ち、家族から虐待も受けていた。その環境から居場所を作るために、窃盗をして自ら少年院に入ったのだ。私は彼が少し微笑みながら優しく語る姿に、最初は「本当だろうか？」と疑った。犯罪や非行を起こした人はとても怖いイメージがあったが、彼はそのイメージとはむしろ真逆で穏やかで素直に質問への受け答えをしていたからだ。しかし、その様子をしばらく見てみると、彼の語りの中に彼の愛情に飢えた淋しさと、深くて大きな心の傷をひしひしと感じた。当時、今の私と同じくらいの年齢だった彼にはとても重く苦しい毎日だっただろう。自分ではどうする事もできない環境の中で私なら耐えられるだろうか。

私たちがよくニュースで見る犯罪も「優しい人だったのに。」とか「まさかあの人が。」などのインタビューをよく見る。最近のSNSのトラブルも、「え？こんなにかわいい高校生が、こんなにひどいアンチコメントするの？」とびっくりすることもある。こういった行動も彼らの置かれている環境や傷ついた思いからきていることが多い気がする。そうなるきっかけは案外身近にある小さなことの積み重ねだったりするのではないだろうか。

私の祖母の家では、様々な果実を植えて季節ごとの収穫を楽しんでいるが、数年前に畑の敷地にある杏の実がほとんどもぎ取られていることがあった。杏ジャムを作りたくて、収穫を楽しみにしており、祖母が私たちを連れて取りに行こうと思っていた矢先だった。

それを聞いて私もがっかりしたが、その話を聞いた曾祖母が悲しそうに「何か理由があるのかもしれないけど、言ってくれたらいくらでもとらせてあげるのね。一度こういうことをしてしまったら、罪悪感なく繰り返してしまうかもしれないね。」とぽつりと聞いた。そんな事があった数日後に、曾祖母は知らない女性が自宅前の小さな畑の作物を物色している所に遭遇した。「一言声をかけてくださったらおわけしますから。」と声をかけたら、女性は申し訳なさうに深く礼をしてその場を立ち去ったそうだった。こちらから声をかけることで、彼女の犯罪にストップをかけることができた。もしかしたら、最初の青年もニュースに出る人たちも、盗もうとしたおばさんも、今の環境がそういう行動をさせてしまったのかもしれない。しかし、一時的な気の迷いだとしても、こういう行動は社会からはみ出してしまう原因になる。そんな負のループから声をかけて彼らを救い出し、受け止めて許すことも周囲ができる犯罪防止の小さな一歩かもしれない。彼らが非行や犯罪に走る小さなきっかけがそこにあるように、私たちの小さな声かけがきっかけで誰かを救い出すこともできるのではないだろうか。

学校生活でも同じようなことがあった。いつも絡んで嫌なことを言ったり、ありもしない噂を流したりする子がいた。最初はその行動が何故かよく分からなかったが、周りが呆れてほっておいたら、もっとエスカレートしてきた。その話をしたら母が言った。「その子は、きっと淋しいんだね。イライラやストレスを抱えて、それを抱えきれなくなつて聞いてほしいーと心が叫んでいるんだよ。案外聞いてあげたらもうしないかも。」その時は正直「面倒くさいな。」とも思ったが、今は少し違った角度でその子のことを理解することができる自分がいる。

人はどんなに強くてもやはり一人では生きていけないのだ。誰かと関われば、時には自分と違う相手を理解し、お互いを理解しようとする努力も必要となる。そうすることでそこに自分の居場所を見

つけることもできるのかもしれない。

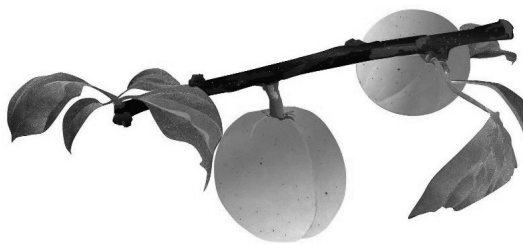
そして、人は人生の中で、大なり小なり数え切れない失敗を重ねる。しかし、それを失敗ととらえるのではなく、生きていくための通過点や出来事ととらえる事も必要なのだ。犯罪は悪いことだ。しかし、その裏には様々な事情も見え隠れする。何故そうしてしまったかをきちんと理解し、私たちが一緒に支えていくことが大切なのだ。一度失敗して、たとえ道を外れても、人生は何かのきっかけさえあれば、いつだって何度だってそこからまた新たな道を作るのだから。

私自身も、これから色々な経験をして、その度に多くの失敗を重ね悩むこともあるだろう。そんな時は自分にできるベストを考え、ポジティブに物事をとらえて自分の道を進んでいきたい。そして、誰かの心にホッとできる居場所ができることを願って、私はこれからも沢山の人と関わりながら、迷わず声をかけ続け手を差し伸べていきたい。

#### 審査員からのメッセージ

犯罪は悪いことだという前提に立ちつつ、周囲ができることや失敗をした時の心の持ち方など、作品を通して淀みなく作者の考えや思い、決意が述べられていました。また、窃盗をして自ら少年院に入った少年の言葉、畑に植えられた杏の実が盗まれた時の曾祖母の言葉、ありもしない噂を流す子に対する母の言葉など、様々な印象に残る「言葉」が随所に登場し、作品に引き込まれました。読み手自身にも「犯罪や非行のない社会づくりを進めていく上で自分に何ができるのか」を考えさせるような、訴える力のある作品だと思いました。

また、一文一文を推敲し、漢字をしっかりと調べ、一文字一文字を丁寧に書き上げたことが伺え、作者の努力が伝わってきました。



京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞

# 可能性の扉を開くたった一つの「機会」

木津川市立木津中学校 一年 津田 新大

「社会を明るくする運動」の目指している「立ち直りに寄りそい、犯罪や非行のない社会へ」は正直なところ、僕には少し遠い世界の話のように感じていた。ニュースで報じられる事件は、自分とは違う「誰か」が起こすものであり、僕たちの日常とは切り離された問題だと思っていた。大きな事件がニュースで報じられていても、僕は「また、あほな誰かがやらかしよった」としか思わなかった。しかし、一人のクラスメイトとの出会いが、その考えが浅はかな固定観念に過ぎなかったことを、強く教えてくれた。

小学生の時のクラスメイトだった彼は、授業中いつも窓の外をぼんやりと眺めているか、机に頭をふせていることが多かった。言葉遣いは少し乱暴で、提出物を忘れることもよくあった。小学校の簡単なテストでも結果はいつもほとんどよくなかった。先生たちもどこかあきらめているような雰囲気があった。僕自身も、彼に対して勉強が嫌いで、やる気がないやつなんだと決めつけていたように思う。

その彼と深く関わるようになったのは、席替えて隣同士になったことがきっかけだった。僕はそろばんを習っていて算数は得意だった。だから、算数の授業でいつもプリントをおわせてしまっていた僕は彼に算数の計算の仕方を教えてあげた。その日から、僕たちの距離が少し縮まった。彼が分からなかったのは、図形や文章問題のような応用的な内容ではなく、割り算の仕方、分数の意味など彼がつまづいていたのは基礎の基礎だった。「こんなことも分からないのか。」「一瞬でっかいと思った自分を恥ずかしかった。僕が当たり前のように受けてきた教育、親や兄に勉強を教えてもらって

いた事、分からない時すぐに質問できた環境、それらが、彼になかったのかもしれない。僕が持っていた当たり前は、決してすべての人のものではなかったのだ。

僕は教え方を変えた。難しい言葉を使つのをやめ、彼がどこで、なぜつまづいたのかを時間をかけて探し続けた。分数の割り算を教えるときは、僕は絵を描いて説明した。「ああ、逆数をかけるってそういうことか。」「初めて心から納得したような声を出した彼の顔を、僕は忘れることができない。たった一つ、つまづいていた所が理解できただけに、彼はこれまでため込んでいた疑問を僕にぶつけ始めた。それから、あれほど嫌っていた勉強に、彼は少しずつ前向きに取り組むようになった。小テストで目標の点数を取れた日には、照れくさそうに笑ってくれた。その笑顔は、僕が知っていた彼のどの表情とも違って、自信と喜びにあふれていた。

一人の人間が、たった一つの機会によって、その可能性の扉を自分の手で開いていく瞬間を僕は見た。彼に足りなかったのは、能力や才能ではなかった。誰かに自分のレベルまで降りてきてもらい、時間をかけてつき合ってもらったという小さな機会だったのだ。

この経験は、僕の目を社会全体へと向けさせた。非行に走ってしまう子たちも、もしかしたら彼と同じなのではないだろうか。家庭の事情で誰も勉強をみてくれなかったり、学校で一度つまづいたまま誰にも助けを求められず、自分だけがとおっていると感じているのではないか。そう考えると、「社会を明るくする運動」がかかげる「立ち直り支援」の本質が見えてくる気がした。それは、罪を犯した人に罰を与えるだけで終わらせるのではなく、彼らがもう一度人生をやり直すための「学びの機会」や「人との信頼関係を築く機会」を提供することなのだと思う。そして、より根本的な「犯罪や非行の防止」とは、社会のすみずみまで、彼に訪れたような「機会」が行き渡る仕組みを作ることではないだろうか。

僕にできることは、まだ小さい。しかし、無力ではない。まずは、



自分の周りにいる友人に対して、先入観や決めつけをやめること。困っている様子の人がいれば、「どうしたの？」と声をかける勇気を持つこと。彼に教えたつもりが、本当に大切なことを教わったのは僕の方だった。

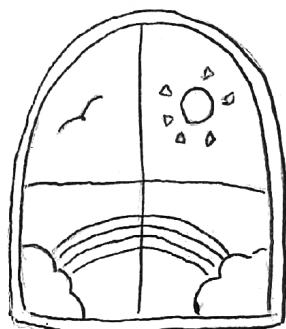
社会を明るくするとは、どこかの誰かがささげる大きなスローガンではない。僕や、みんなの一つの行動が、隣にいる誰かの可能性の扉を開く鍵になるかもしれない。その小さな鍵をあきらめず、根気強く多くの人が手渡し合っていくこと。その先にこそ、「犯罪や非行のない、誰もが輝ける社会」という光があると、僕は固く信じている。

#### 審査員からのメッセージ

小学校時代のクラスメイトとのやり取りの描写が具体的に、作者が勉強を教えている光景や、心から納得したクラスメイトの表情が思い浮かんできました。飾らない言葉で表現されていて、とても親しみやすさを感じる作品でした。

作者はこの経験から、非行に走ったり罪を犯してしまう人の周囲にいる人の行動や環境が大切であることに気づき、そしてさらに一歩前に考えを進め、自分ができることは何かが述べられており、犯罪や非行のない社会をつくっていくことを深く考えた心の様子がうまく表現されていました。

本作品は、「京都府推進委員会委員長賞」とともに、全国表彰として「日本BBS連盟会長賞」を受賞されました。おめでとうございます。



京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞  
信じてくれる人の温かい存在

福知山市立南陵中学校 二年 下司 帆乃果

私はこの作文を書くにあたって、「一度失敗した人に、再犯を起こさせないためにできることはなんだろう?」という先生の質問について考えていました。反省している人でもなぜ、再犯してしまうのか。学習の中で私は、誰からも信じてもらえずに、社会から孤立していき、会社にも雇ってもらえず再犯せざるをえない状況に陥ってしまったと知りました。反省しているのか信じられない、一度犯罪を犯してしまっている人はまたなにかするかもしれないという人々の不安と疑い。私ももし、「反省しました」、「改心しました」と言われても、すぐには受け入れられないし信じれないと思います。でも、そのなかで信じて受け入れてくれる人がいたら。社会復帰に向け支えてくれる人たちがいたら。再犯をせず、真つ当な人生がやり直せるのではないだろうか。

「信じて、待つて、私のために動いてくれる人がいたから」

これは私の知り合いが不登校から立ち直れた理由です。

今では楽しく高校生活をおくっている彼女ですが、彼女には中学の頃、いじめが原因で、不登校になった経験があります。そんな彼女は、どうして立ち直ることができたのか。まだ小さかった私はその場の好奇心で、彼女に尋ねました。

すると彼女は、

「っーん」

と、少し考えたあと私の方を見て、

「母さんとか先生とかいろんな人じゃないっばいの人はずっと私のためにいろんな選択肢を探して、いろんな方法を試して、私が行動するのを待つててくれた。それでも私が動けなくても、辛抱強く待つて

てくれた。離れていく人も無理だと言ってくる人ももちろんいたよ。でも、ずっと私のために何かしてくれていて、そんな自分を信じて動いてくれている人達のために自分も変わらなければならぬと感じたんだよね。

行かなくなった学校や習い事の席。いつ来るかもわからないのに私の席を空けておいてくれたの。ずっと信じて待つていてくれたいたのかな。信じてくれていたんだと思う。そんな人たちがいたから、私は立ち直ることができたの。」

と昔を思い出しているような表情で少しうれしそうに答えてくれました。

こんなキラキラした話は他の人からすると一見作り話のよううまくいった話かもしれないけど、彼女からこの話を聞けて、人が信じて待つてくれる温かさってこんなに人を変えることができるのかと幼い私は当時、とても衝撃を受け、感激したのをよく覚えています。

私がもし、彼女の立場になって学校に行けなくなったと考えたら、自分が嫌になって、行けないことに苦しんで、一人孤独でずっと自分を責め続け、塞ぎ込んでいるんじゃないかと思えます。想像しただけでも、気が重くなるようなそんな気持ちをずっと抱えて一人、真つ暗な世界でもう立ち直れないかもしれない。でもそんななか、母や先生、習い事の先生など、だれかが自分のことを信じてくれている、待つてくれている。そんな人の存在はとても大きく、希望の光となって照らしてくれると思います。そんな人達がいるから、人は前を向いて一歩踏み出していいのではないのでしょうか。

それは、自分が犯してしまった罪を反省し、気持ちを改めた人にも同じようなことが言えると思います。

反省した自分を信じてくれて受け入れてくれる、会社や家族。そんな信じて待つてくれる人がいるだけで、人は変わることができる。再犯をする人も少なくなると思います。

罪を犯してしまったことは許されることではない、許せない人もいるかもしれないけどここからまた、罪を犯すことがないように、同じ過ちを繰り返させないために、私たちはその人たちの気持ちを信じて、更生できる温かい社会を作っていくべきだと思います。そんなふうに信じて受け入れる社会を作っていくことで、社会はきっと明るくなっていく。私はそう思います。

#### 審査員からのメッセージ

「一度失敗した人に再犯を起こさせないためにできることは何か」について、作者が深く考えたことが表現されていました。特に作品の中心部分である不登校から立ち直った知り合いの話については、彼女の言葉が詳細に書かれていたことで、より深く読み手に響いたと思いますし、書き出しに「信じて、待つて、私のために動いてくれる人がいたから」という彼女の言葉を持ってきたことで、より内容に引き込まれるようになったと思います。こうした、先に結論部分や要諦となる言葉を持つてくる手法が随所に見られ、読み手により伝わるよう、文章や構成が非常に練られていたと思います。

